

美味とは何か？（４）

研究会員 栗田 学

純粋とは一体何か

化学大辞典にも、化学辞典にも、化学用語辞典にも、この語は載っていない。ただ辛うじて化学語に純粋〔英Purity, 独Reinheit（女性）、仏Pureté（女性）〕と、外国語との対応のみである。そこで今度はWebsterをひいてみると、まぜものや有害物を含まぬ状態とか条件のこととか、汚染成分や汚い言葉を含まぬこととか、白色や色調をふくまない（これは光学的）状態などがある。つまり社会科学と物理学だけにしか意味が含まれていない。

あえて私が化学的に定義してみるなら、『注目する化学種が第三物質と共存せず、安全理想的に単独に他と独立して存在する状態をいう』とでもなろう。しかしこのような理想状態はこの世では存在し得ないのだ。私が使った『過精製』という語は化学的には無意味な語であって、人間としては、“やりすぎた”ことであり、生物学的にみると精製されすぎて、“生理毒”を発揮するような状況になるのであろうことを示唆した新語である。

学者は『純粋が何故悪い』と反論する。私は純物質こそ猛毒であると反論したい。例えば空気が汚れたからといって、純酸素で呼吸させれば良いだろうか？ そんなことをすれば、生物



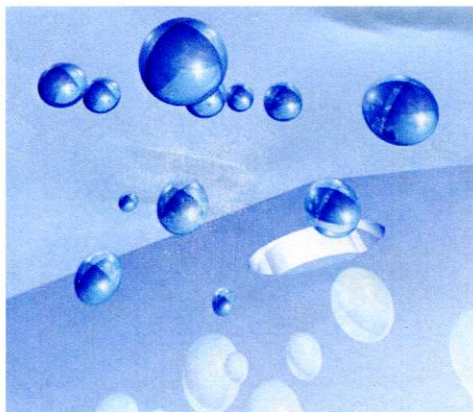
は急死するであろう。純酸素は猛毒だからである。“純清な大気”というものは主成分以外に無数の生物達からの色々のフェロモンや花粉類、孢子類、細菌類、泥粒黄砂等が水蒸気と共に、それぞれの環境に応じて含有されている。これらの微量成分は地域環境に依る差異が大きく、ゆえに「森の中はすがすがしい」と官能するのである。これが自然天然というものだ。

一方水にしても同様で、純水（例えば出来たての再々蒸留水や、マススペクトルで作られた水）は猛毒であり、これを飲めばたちまちにして病気をひき起こすであろう。天然の山水というのは土壌や岩石などの微量ミネラルをはじめ、上記の生物圏のすべてを地域環境に応じて含有

するものであり、故に清水は旨いと感じるのである。『塩』にしても変わるところがない。海水を人工のイオン交換樹脂膜に通過させれば、海水中のプランクトンはじめ無数の微生物や、それらが生活することによって傍生するアミノ酸や糖や有機酸や諸種の分解生成物までも、分子のオーダーで分離精製されてしまう。それのみか、イオンの透過性、膜特性は言うに及ばず、イオン半径、帯同溶媒、荷電数、形状、加電圧などによって変動するものであるから、昔の砂や太陽や風といった自然な材料を用いて造った塩とは、主成分以外の微量成分において跛行を起こすのは当然である。

このうち有機成分は蒸発濃縮過程でいろいろ複雑な化学変化を起こすであろうが、そうすることによって得られて来たのが昭和46年以前の食塩なのである。特にごく微量にしか存在していない重金属成分は無機成分である以上、蒸縮行程で変化するものではなく、それ以前のイオン交換膜の透過過程において、すでに跛行させられたままの塩になってしまっているはずである。このような過度に精製された塩は（と言ってむろん純品ではないが）生物の自律神経系の支配を満足させることができず、主婦は単純に“おいしくない”と言い、アサリは足を出さないまでのことだ。

この事実こそまことに重要なものであり、神聖なる現象と信ぜざるを得ない。科学も、信するが故の科学ではあるまいか。



科学の不可知性についての私見

自律系の官能というのは、一旦大脳で認識されたのち“旨い”という自意を持つのである。この辺になると、サッパリ皆目判らぬのが現代科学の限界であり、科学万能の思想を打ちたく最良の材料の一つである。官能が一旦拒否した信号には大脳が否定の判決を下し、他方受け入れられるべき信号には必ず応能するという生理を、〇〇〇はもっと深く考察すべきである。

最近、日本においてもそうであるが、特に欧米諸国の著名な学者達が数多く“反科学”の思想を高揚したり、“科学の不可知性”を論ずる傾向はこれを暗示する。さらに西欧的物質科学文明の行きづまりを解決できるのは、東洋思想、特に釈尊が解かれた仏教思想のみであるという国際科学史会議の結論は正しいと思惟する。

何となれば西欧における物質科学文明とキリスト教的宗教思想は常に相反する争克に終止しており、これに反して東洋思想の midpoint にある仏教や易学、特に『般若波羅密多心経』の思想は、並み居る科学者の唱える主張と少しも矛盾するものではなく、相競するものでもなく、互いに他を相補し合うことが出来るからである。仏教の定義あたりもこれを強調しておられる。ただ日本の仏教のここ100年の歴史には、科学者にとってまことにまどろっこい面を見とることが出来る。しかしこれは決して仏尊の教義そのものに源を発するものではなく、それを布教すべき層に住む人々の不勉強に基づいた、いわゆる神秘思想的、乃至は密教的な素因が、多くの日本の科学者達の共感と悲鳴とを得ることに失敗したからであろう。

すなわち、科学は未知なるものへの期待を垣に待つ。しかし1960年代までのそれは、未知が既知に変わった場合、バラ色の未来を期待する夢とともに投影していたといえよう。だがしかし1970年代に入るや、多くの科学者は、生命現象、公害現象はじめ諸々の現象に、自己の限界を知り、未知ではなしに科学の『不可知』を認め、神のみが支配するこの宇宙と万象とを

、宗教的なココロとして理解すべきであるとの
指向を見出しつつあるように思う。

※MDAレポートは皆様のミニコミです。MD
Aレポートに関するご批判、ご意見ご提言、
皆様の体験レポート（家庭用、工業用）ある
いはご質問など何でも結構です。書欄にて当
社までお寄せ下さい。

〒921-8831

石川県石川郡野々市町下林4-499-2

丸子電子株式会社

TEL<076>246-6806

FAX<076>248-0103

MDA特性総合研究所

TEL<076>246-6863